

## オホーツク【湧別町】

かたおか せつこ  
片岡 節子さん チューリップ栽培愛好家

1955年生まれ、湧別町出身。東海大学建築学科卒業後、東京都の大手建設会社に入社（一級建築士）。帰郷して実家の建設会社を手伝う。体調不良となった夫に代わり、家の中心的存在として農業に従事。その傍らチューリップ公園のボランティアガイド等の地域活動に参加。現在は農協にパート勤務。



## 「1日を大切に生きる」、人と人との繋がりが活気に

### きっかけ

地元中学では女子初の生徒会長を務めるなど好奇心旺盛で男女の差を意識せず生きてきました。建設業界にいた頃は、図面作成などで女性特有の細やかさは評価されましたが、女性はお茶汲みなど簡単な仕事だけが当たり前の時代だったので、職場では男性中心社会との闘いでした。16年前、義父が癌を患ったことで、自分も検診を受け、癌を早期発見でき、「明日死ぬかもしれない、今日できることは今日やる」「日頃から1日を大切に生きる」をモットーに、仕事をしながら家事、子育て、介護をこなしつつ、様々な地域活動をしてきました。

### 苦勞

建設業から一転し農業をはじめるときには、何もわからない中で多くの方に支えられ、人が助けてくれるありがたさを実感したので、農業をやって良かったと今でも思います。農業に誇りを持つと共に自然の素晴らしさを発見でき、作業の合間に写真を撮ることが息抜きになりました。力仕事もありますが、「『女性だから』できない」と言われた時は納得できず、「『あなたには』の間違い」と反論します（笑）。日々を大切に生きることは難しいことで、「来年はいないかもしれない」という状況に陥らなければわからないのが悲しいところです。

### 満足度

チューリップの魅力を知ってから写真を撮るようになり、癌で入院していたときに、これまで撮り続けた写真を整理してまとめたものが11年前からチューリップ公園などで活用され、以来「チューリップおばさん」の愛称が定着しました。テレビや新聞の取材を受けると共に、投稿がライフワークとなり、人と人との繋がりが広がっていくことに喜びを感じます。チューリップ公園でボランティアガイドをしていると、「テレビに出ていた方でしょう」と声をかけられたり、新聞記事を読んだ方からお手紙が届いたり、時には訪ねてくる方もいます。

### これから

最近まで町の社会教育委員を務め、地元合唱団の代表も続けています。人と人との繋がりで映画鑑賞会や音楽コンサートの企画運営を任せられるほか、仲良くしている町社会教育委員長の宮澤さんと共に様々な地域活動に精力的に関わっています。チューリップ図鑑も年々数が増え、今では8冊800種類以上の写真をファイルしています。忙しくなるとチューリップ公園に通う時間もないので、自宅の庭でチューリップ400種類以上を栽培し、写真を撮っています。外での活動が充実している代わりに、家の中はなかなか片付かないのですけどね（笑）。

北の★女性たちへの  
メッセージ

趣味やボランティア活動などで深まる社会との関わり、広がる人と人との繋がりが、心豊かに生きる力を支えてくれると実感しています。仕事を持つ主婦が活動をするには、多少の家事の手抜きも必要。夫の協力があって活動できれば、元気も倍増です。

## オホーツク【滝上町】

たなか ようこ  
田中 陽子さん 風香房 前代表

1957年生まれ、滝上町出身。名寄女子短期大学栄養学科卒業後、滝上町の放課後児童保育に従事し、役場臨時職員を経て結婚。1988年、ハーブ栽培や加工品の製造・販売を目的とした「風香房」の立ち上げに参画し、翌年から1998年まで代表を務め、現在も中心メンバーとして活動。



## 好きなハーブ栽培で町を盛り上げ、ママの就業にも寄与

### きっかけ

滝上町が、芝ざくらに続く観光基盤づくりとして注目したのが香りの植物（ミント生産日本一）による観光でした。私がハーブ栽培を行うようになったのは、井上幸子さん（由仁町「ゆにガーデン」園長）に誘われたのがはじまりで、1989年に「香りの里ハーブガーデン」が整備される1年前、観光PRのために役場の観光課からハーブを使用した加工品などの商品開発を依頼され、井上代表とともに「風香房」を立ち上げました。翌年、井上さんがハーブガーデンの代表に就任することとなり、私が「風香房」の代表になりました。

### 苦労

昔から野草が好きで、庭に植えてケーキに入れたりドライフラワー等を作って楽しんでいました。「風香房」を1988年に設立してから初期の頃は、日本経済がバブル期で商品がおもしろいように売れましたが、現在は低迷しており苦労しています。代表をしていた時は、従業員に給料を払うとほとんど残らないこともあり、子ども達が大学に進学する頃は家計も大変で家族の理解が得られないこともあり、代表を降りて一従業員となりました。夫が、町にはこの事業が必要だということを理解してくれたので、なんとか続けられました。

### 満足度

ハーブ商品の生産・加工では、大きな設備投資や経済的な負担はありませんでした。最初は、町設の加工センターなどを活用して作業し、その後、実家の倉庫の2階部分を専用の作業場として使用しています。もともと町から商品開発を依頼されて始めたこともあり、商品開発で資金が必要となったときも町が半額を補助してくれるなど、様々な支援を受けました。営業で物産展等を回って、お客様からハーブティーなどを美味しいと言っただき評価されたときは一番嬉しいです。また、毎年のミントの出来あがりも楽しみにしています。

### これから

ハーブの収穫や商品の加工・生産は、7月から10月の季節的な作業で、多いときは7～8人のパートを雇っています。これまで約30年、子どもが小さくフルタイムで働けない方々を何人も入れ替わりで雇ってきました。最近、子どもが小さくてもフルタイムで働く方が増えて継続するようになったので、少し年齢層は高いです。今後は、ハーブを使った新商品の開発や新たな活用方法にもチャレンジしていきたいです。また、滝上町では「滝上100人女子会」という幅広い年齢層の女性が集まる機会があるので、後継者が見つかるかと思っています。

北の★女性たちへの  
メッセージ

毎日の仕事に追われ、明日の天気を気に掛けつつ収穫の時期が過ぎる。そんなことの繰り返しで早30年。好きな事をしていても迷いや不満はありますが、沢山の人に支えられ何とかやってきました。人との繋がりや出会いを大切に、これは一生の財産です。

## オホーツク【興部町】

ふじた あきこ  
藤田 明子さん おこっペスタイル ま・な・ぶ 代表

1969年生まれ、興部町出身。北海道立旭川高等看護学院卒業後、稚内市の保健師として勤務。その後、興部町の保健師として勤務し2011年に退職。29歳で結婚し、現在中学2年生と小学2年生の子どもがいる。2015年に仲間と共に「おこっペスタイル ま・な・ぶ」を設立。



(左から) 山根詩織さん、藤田明子さん、高田裕美さん



## 女性の感性を活かして「ゆるく・がんばらない」をモットーに

### きっかけ

町の中には、いろいろな能力や魅力、技術をもっている方がたくさんいます。サークル等はいっぱいありますが、その垣根を越えて魅力ある方々をシェアする、活動をPRする場があってもいいのではないかと、ママ友の山根詩織さんに打ち明けたのがきっかけです。山根さんは、以前から色々な事を学びたい意欲はあったけど家が自営業で頻りに札幌市や北見市に通えないという思いがあったので、意気投合しました。また、パソコンを使って在宅ワークを行っている高田裕美さんと、さらに1人が合流して、現在4人の事務局を中心に活動しています。

### 苦勞

仕事を続ける上で、子育てが大きな負担とは感じていませんでしたが、上の子が小さい時、自分がイメージするような子育てができていなかったのではないかと改めて考えるようになり、もっと子どもと一緒にいたいという自分の本当の気持ちに気づきました。42歳のとき、役場の人事異動が自分は何をしたいのか見つめ直すきっかけとなり、退職を決断しました。また、山根さんは、工場経営の家に嫁ぎ、仕事一筋のご両親の手前、外で何かをやることに「やっちゃいけないもの」と思い込んでいましたが、決断して参加してくれました。

### 満足度

「ま・な・ぶ」の活動は、主に地元の方に講師をお願いして、得意分野を披露していただくとともに、参加者に学ぶ機会を提供しています。事務局メンバーも自ら講師としてアロマ等のノウハウを披露するなど楽しみながら活動しています。これまで、編み物や料理などのテーマで講師を見つけて開催しましたが、参加者から賛同を得られたり、参加者自身がやりたいことを見つけ、新しいことにチャレンジしたり、何かを学び始めるきっかけになったときが一番嬉しいです。また、講師自身がイキイキとみんなに伝えようとする姿にも感動します。

### これから

今後も活動を続けていくために、「ゆるく・がんばらない」をモットーにしています。皆さん家庭や仕事があるので無理しないよう、疲れたら休み、自分たちも楽しみながら続けていきたい。ただ、多少疲れていてもこれはやりたいと感じるときは、自分の喜びになっているときかもしれません。活動資金の面で、必要な経費はみんなで負担していますが、会場使用料の負担が大きいため、各種助成制度の活用を検討したり、町教育委員会などから支援を受けながら、楽しく学んでいければと思います。

### 北の★女性たちへのメッセージ

好きなことや特技を分かち合い表現することで、新たな繋がりや扉が開かれ、楽しみながら自分を成長させることにつながります。「育む」「創造する」という女性の特性を閉じ込めず、今いる場所で表現し、女性がイキイキ輝けば、家族も社会も幸せが循環します！

## 十勝【幕別町】

おがさわら みなこ  
小笠原 美奈子さん 農家のお店 ひより 店主

1970年生まれ、幕別町出身。短大を卒業後、幕別町役場に保育士として入庁。結婚後、産休・育休を経て退職。2012年に夫の実家に就農。2013年から農家の店「ひより」をオープン。十勝若手女性農業者ネットワーク「農と暮らしの委員会」メンバー。家族は夫、長女、長男。



## 「愛を感じる」農家のお店で地域を盛り上げたい

## きっかけ

結婚16年目の2012年に夫の実家に就農することになり、翌年経営移譲しました。私自身、農業をやることにとても後ろ向きでしたが、やるからには自分の道を切り開きたいと思い、ジュニア野菜ソムリエの資格を取り野菜の勉強をしました。レタス中心の野菜農家でしたが、自家用で作るトウモロコシがあまりに美味しかったのでいろんな人に食べてほしいと思ったのがきっかけで、農園の敷地内にテントを張り、薪ストーブで茹でて販売しました。それがとても好評で、近所の商店跡の建物を譲っていただき、そこから農業2年目に農家のお店「ひより」を始めました。

## 苦勞

小笠原農園は、私たち夫婦と夫の両親の家族経営ですが、私たちの就農後は作物の種類を増やしたことで、また、普通一般に行われている栽培方法から有機栽培に移行したこと、さらに、お店を始めたことで、仕事量がとても増えてしまいました。また、「ひより」の営業期間（8～9月）は、朝もぎトウモロコシの収穫時期でもあるため、その大仕事を終えてからの開店準備は少々きつく、みるみる痩せていきます。でもスタッフやお客さんに支えられながら、充実した毎日を送っています。

## 満足度

期間限定ですが、自分の居場所が持てたことは大きいです。十勝管内を中心に旅行客が立ち寄ってくださり、何年も繋がって、そういった中で「ひより」ファンという方々がお子さんの学校の間に手伝ってくれたりもします。直接対面しての販売なので自分たちの作った野菜に対し、「元気が出る」「愛を感じる」更には「ここに来ると癒される」と言ってもらえることも。自慢のリーキ\*が営業の末、地元はもちろ札幌などのホテルや飲食店にも広がって評価をいただき、頑張りに結果がついてくると自信も持てるようになってきました。

## これから

将来の夢は、羊やアルパカなどの動物を飼って、家族で仲良くファームインをして地元を盛り上げることです。それにはまず、もっと勉強をしていろんな人においしいと笑顔になってもらえるような野菜作りをすること、そこから「ひより」を充実させ農業経営から独立したものに、年間を通して営業できるようにすることを目指しています。農業を始めて6年とまだまだですが、1年1年成長を感じ、やりがいも出てきました。これからも幕別町、十勝、北海道と人との繋がりを大切にしていきたいと思っています。

北の★女性たちへの  
メッセージ

一步を踏み出してみると意外となんてこともなかったりします。夢は口に出して言ってみましょう！そして言い続けることが大事です。常に夢を口にしてると、きっと協力してくれる人が現れます。ピンときたらワクワクする方へ！が私のモットーです。

\*リーキ…西洋ネギ。地中海沿岸原産の野菜で、ポロネギとも呼ばれる。

## 十勝【広尾町】

きくち あき  
菊地 亜希さん 菊地ファーム、ピロロフェス実行委員会 代表

1984年生まれ、千葉県出身。帯広畜産大学を卒業後、大樹町で2年間酪農の実習を受け、夫と広尾町で就農。町の魅力や大切さを楽しみながら気付ききっかけをつくることを目的に一次産業・食・音楽・雑貨販売を融合させた体験型イベント「ピロロフェス」を企画運営。家族は夫と長女（0歳）。



菊地さん(右)と夫と長女



## 産業体験イベントで、町に恩返ししたい

## きっかけ

広尾町に就農してからずっと、温かく迎えてくれた町に恩返しをしたいという気持ちがありました。2013年に町主催の「広尾みらい塾」に参加し、初めて農家以外の同世代の方たちと交流を持ち、そこで町民には酪農が盛んなことが知られていない事を知りました。自分たちは誇りを持って就農したので、もっと認知して欲しくて楽しみながら知るきっかけになればとピロロフェスを企画しました。また、町の基幹産業である一次産業をもっと知ってもっと町を好きになるきっかけにしたいと2年目は林業、3年目は漁業とそれぞれの産業をテーマとしたイベントとして開催しています。

## 苦勞

1年目は自分の思いと勢いで開催することができましたが、2年目以降は実行委員の中にも辞めていく方がいたり、酪農以外の産業をテーマにすることで運営に関わる方は増えましたが、意見の食い違いも出てきたりと実行委員会を進めていくことも大変でした。イベントとしては、例えば、酪農なら乳牛はいつでも牛乳を絞れると思っている方もいる、そういった素朴な疑問に答え、ちょっとでも興味を持ってもらえるようポップな感じで身近に産業を感じていただける体験メニューなどを工夫しました。

## 満足度

一次産業に触れる機会がなかった方々が実際に産業を体験し、その空間を感じてもらうことができました。林業の体験では伐採を実際見学し、その大変さを感じました。普段何気なく見る景色ですが、それは管理している方がいるからこそ、当たり前のことではなくそこに林業という産業があることをわかってもらえたのではないかと思います。また、このイベントがきっかけで牧草の収穫作業を見学に来た方もいて、興味を持ってもらえたことに達成感を感じます。実行委員はみんなボランティア、毎回大変すぎて「もうやだ」と思うのですが、お客さまの喜ぶ顔を見るとまた頑張れます。

## これから

続けることに意味があると思っています。イベントにかけられる予算が少なくなっても、形を変えながら続けていきたいと思っています。自分自身としては、牧場で加工品をやりたい、という夢があります。ここに乳製品のお店をひらく。それがきっかけで、町外の方たちにも広尾町を知ってもらう。ここに…この場所に来てもらうことに大きな価値があると思っています。「この牧場があるから広尾町に行きたい」という存在になりたい。それが、私のこの町・この地域への恩返しになると思っています。

北の★女性たちへの  
メッセージ

1回目を開催したとき、手書きの手紙に思いを綴って、参加を呼びかけたことで多くの方に共感してもらえたのだと思います。思いがあれば困難があっても頑張れるし、アドバイスをくれる方もきっといます。あとは何よりもまず、自分が楽しんでやることかなと思います。

## 十勝【陸別町】

さか い と も こ  
坂井 友子さん 陶芸家、cafe & うつわのお店 tomono オーナー

1974年生まれ、新潟県出身。新潟大学院で書道を専攻していたが趣味で陶芸教室に通い、中退して陶芸家として全国の陶芸窯、カフェ、美術館等を巡る旅をし、2001年に陸別町に移住。2013年に「tomono」を開店。夫、子ども4人と共に町内在住。



豆乳リゾットと  
自家製パン(コーン)



## 毎日笑顔で幸せあふれる「うつわカフェ」

## きっかけ

高校生の頃からカフェが大好きで、いつか自分の店を持ちたいとずっと思っていました。趣味で陶芸を始めたのも、カフェに生かせると思ったからです。大学院を中退し全国を巡っていたのは、自分の陶芸窯を持ちカフェを始めるための場所を探していたんです。実は、アフリカまで行ったんですよ(笑)！でも、やっぱり食べ物おいしい所がいいと思って北海道に焦点を絞り、幾つかの町に移住の問い合わせをしたところ、陸別町が一番先に住居を提供してくれて、夫の仕事もすぐ決まったので、移住しました。

## 苦勞

カフェは、できれば都会ではない場所がいいと思っていたので、陸別町内でもあちこち探しました。現在、カフェをやっているこの建物は、元簡易郵便局で商店もやっていたので改装しやすいと思って、3回目の引っ越しでようやくここに落ち着きました。それからカフェの内装を手作りして、7年くらいかかって店をオープンすることができました！一番大変だったのは、金銭面かな。この場所は、陸別町の市街地から車で15分くらい、周囲に何もないので「はぐれカフェ」なんて言われていますよ(笑)。

## 満足度

毎日嬉しく、毎日幸せで、毎日が満足しています。不満は全くありません！念願だった自分の陶芸窯を持ち、自分で作った器を使ってカフェで料理をお出しすることができて、本当に嬉しいです。20年くらいかかって夢が実現しました！放課後に書道教室と陶芸教室をやっていますが、本当にカフェの仕事が好きなので、書道教室の日は昼間に市街地のカフェでお手伝いをしています。うちのカフェは、本当に辺りな場所にあるのですが、お客様から「この場所にあって良かった」と言ってもらえると、ここでやって良かったと感じます。

## これから

カフェも陶芸も書道も「場所」が必要なことですが、場所を選ばずにどこでもできることをやってみたくて、写真と文字をInstagram(モバイル端末の画像共有サービス)で発信し始めました。書道を長くやっているのも文章や言葉になじみがあり、陸別町の広報誌や道新のコラムに連載をしていることをきっかけに、写真も好きだったので両方を組み合わせて、写真と言葉の発信を広げていけたらと思っています。他には、サッカー審判の資格を取得して娘のチームでやっているのも、こちらも続けたいですね！

北の★女性たちへの  
メッセージ

絶対に笑顔を絶やさずに前を向いている、それだけで毎日幸せになれる。人は幸せになるために生きているのに、幸せでは申し訳ないという思いがどこかにあるような気がします。幸せで当たり前！毎日生き生きと、胸を張って堂々と幸せに過ごしてください。

## 十勝【芽室町】

すずき ゆか  
鈴木 由加さん 手づくりおかずのすずきっちゃん 代表

1965年生まれ、帯広市出身。専門学校を卒業後、美容室を開業。1987年畑作農家の夫と結婚。2001年に農産物加工施設「すずきっちゃん」を開業。十勝キャリアデザインネットワークの第3回キャリアデザイン大賞を受賞し、現在会長も努める。家族は夫と長女夫婦。



## 農業を楽しんで、おいしい手づくりおかずをお届け

## きっかけ

21歳の時に農業を営む夫と結婚しました。土に触れるという経験がなかったので、農業はすごく新鮮なことでした。しかし、農業に関わるうちに「自分はアルバイトとかわらない。」「夫のパートナーになれていない。」と感じるようになりました。その頃、芽室町が女性農業者のスキルアップに力を入れており、自分も道外へ研修に行きました。この時、農業の付加価値化などに取り組む全国の女性達に出会い、自分は地に足がついていなかった、自分がやれる事は何かと考え、規格外野菜で農産加工品の製造販売をしようと思いつきました。

## 苦勞

25年前婦人科の病気で子どもが産めなくなり、その半年後、今度は交通事故で顔に大けがをしました。女性として大切なものを失ったと、2、3年下を向いて生活をしていました。ただ、その時に農業としっかり向き合うことができたのだと思っています。また、販売をはじめた最初の3年は商品売るノウハウを全く持っておらず、鳴かず飛ばずでした。それでも全国の仲間たちが「すずきっちゃんホームページプロジェクト」を立ちあげ、協力いただいて「すずきっちゃん」のホームページを作り上げ、そこから少しずつメディアにも取り上げられるようになりました。

## 満足度

この仕事をしていると商品を通じて知らない人と繋がることが多々あります。ある繋がりを通じて大阪の高校生から学校祭で行う模擬店用の「いも餅」を作って欲しいという依頼がありました。サンプルを送ると高校生が別のものに加工し、更にこちらも学生の要望に応える修正をするなどやりとりをして、商品を完成させました。その高校生が修学旅行で芽室町を訪れ、対面式へ出席すると、模擬店のために学生がお揃いで作ったTシャツを私の分まで作ってくれていたのですよ！1本の線が2本、3本と繋がりが広がっていくことを実感しています。

## これから

商品内容をもっと充実していきたいという野望は当然あります(笑)。それから、娘が結婚して、思いもよらず農業の後継者になってくれました。今、夫婦そろって一生懸命に農業をやっています。私が何か教えられるわけではないけれど、娘が楽しいことを見つけながら、農業をやっていけるよう、私も日々を楽しく過ごしたいと思っています。自分の楽しさは自分でしか見つけられないものだから…。そして、私はこれからも夏は一生懸命働いて、冬は一生懸命遊んで、よく笑う。そうすれば健康でいられると思っています。

北の★女性たちへの  
メッセージ

できない理由だけを考えないこと。どうやったらできるのか。やらなきゃいけないじゃなく、自分のしたいこと、思いを口に出していれば、必ずカタチになるのです。誰かの耳に入れば、そこから繋がって応援してくれる人が現れますよ。

## 十勝【本別町】

## 本別発・豆ではりきる母さんの会

1995年にJ A女性部の味噌作りサークルが結成され、菓子作り、豆腐作りのサークルが次々に発足。2000年に3つの会が統合し「本別発・豆ではりきる母さんの会」を設立。豆の加工品を製造・販売し、「日本一の豆のまち」をPRしている。



## 本別の豆のおいしさをたくさんの人に知ってほしい

## きっかけ

農家である私たちは、自分たちが作ったおいしい豆をもっと食べてもらいたいという思いから、J A女性部の活動の中で味噌作り、菓子作り、豆腐作りのサークルを立ち上げました。それぞれ自主活動していましたが、「本別町の豆のおいしさをもっとたくさんの人に知らせたい」と考えるようになりました。そこで、3つのサークルを1つにして「本別発・豆ではりきる母さんの会」を設立しました。2000年に「北海道農業元気づくり事業」を活用して「本別まめ工房」を建設し、本格的に加工品の製造を開始しました。

## 苦勞

まず、活動を知ってもらうことが大変でした。農業の合間に工房に行かなければならないので、最初は家族の理解を得るのも難しかったですね。企業化したために、それまでの気軽なサークル活動とは違って売り上げを伸ばさないといけないので、作ったものをどうやって売るのが悩んで、訪問販売などもしました。札幌市のイベントで出店した時には、「本別町ってどこ？」と聞かれたり…(笑)。でも、地道な努力が少しずつ実って、今では「豆のまち本別町」をたくさんの人に知ってもらえたと思います。

## 満足度

やっぱり、お客様に「おいしい」と言ってもらえることが一番嬉しいです。直接お客様とふれあって豆のおいしさを知ってもらい、リピーターの方が増えているので本当に嬉しいですね。あとは、一緒に活動する仲間ができたことも良かったなと思っています。本別町の豆を使って何かしたいとずっと思っていて、仲間がいたのでこまめなことができました。今では、加工品を作りながら色々な話をして、悩みを相談することもあります。そして、売れ行きが伸びたらもっといいんですけどね(笑)。

## これから

私たちが年齢を重ねてきたので、できれば若い方にメンバーになってもらって、その方たちに技術を継承して10年、20年と長く続けてほしいなと思っています。でも、ちょっと難しいかなと思いますので、今は自分たちのできる範囲で、今のままやっていきたいですね。商品開発では、もう少し保存のできるものを考えて作っていきたいです。そして、少しでも収入につながればいいな(笑)。「日本一の豆のまち本別町」が、もっとたくさんの人に知ってもらえるように、これからもがんばっていきます。

北の★女性たちへの  
メッセージ

何か始めたいと思った時、身近なところにチャンスがあります。家族を大切にして感謝しながら、でも家に閉じこもらないで思い切って外の世界に出てみると、みんな扉を開いて待っていてくれるのです。「為せば成る」、悩むなら実行しましょう！



## 十勝【更別村】

## 国際トラクターB A M B A 実行委員会

2003年に農業用トラクターを馬（メカ馬）に見立てたバンパレースを更別農業にちなんだ手づくりイベントとして開催。村内外から約200名が実行委員としてイベントを運営。14回目を迎える2016年に女性部門の特別レース「メカジョ・スズランカップ」を開催。



## 農業女子、生き生き笑顔で「メカ馬」を操る

## きっかけ

農家一戸あたりの農地が平均50haの更別村。そこで活躍するトラクターを使い地域を盛り上げることを目的に2003年からトラクターB A M B Aを開催してきました。このイベントをプライベートで見ていたテレビ局の方が「おもしろい」と、ドラマ「農業女子はらべ娘」の中で女性がこの大会に参加するシーンが登場しました。実行委員会では、このドラマに共感したこと、実際にトラクターに乗って農業をがんばる女性がたくさんいることから、女性農業者特別レース「メカジョ・スズランカップ」を開催しようということになりました。

## 苦勞

レースには過去にも数名の女性が参加したことはありますが、女性限定としては、初めての開催ということもあり、「参加者が集まるのだろうか」という不安がありました。また、レースへの参加は原則として、トラクターは自前であるため、トラクターを持ち出すこと、トラクターそのものを会場へ搬入すること、これには家族（特に男性）の理解がないと難しい部分があります。参加者にはトラクター運転の経験者だけでなく、初めての方もいましたので、練習時間を設けたりもしました。

## 満足度

参加された女性たちが、前日の練習や当日のレースでも笑顔で生き生きと操作されているのを見たときは、やってみて本当によかったと思いましたし、大会をきっかけに農村でトラクターをかってよく操る女性が増えるといいなとも思います。また、大会の実行委員会は毎年、村内外から集まった200名の方たちで、約半年間かけてイベントを作り上げていきますが、トラクターB A M B Aに参加するだけでなく実行委員会にも多くの女性が参加し、イベントの成功に尽力しています。

## これから

女性限定の「メカジョ・スズランカップ」は第14回大会だけの特別レースとして実施しました。しかし、参加者の生き生きとした笑顔を見ると、今後も引き続き実施できたらいいと考えています。将来的には常設レースとしていければと思っています。また、最近では、農家に嫁いで農業になる女性だけでなく、自ら新規就農する女性も増えており、さらにトラクター未経験者だけの部門があると、より一層、女性が農業や農村に興味を持つきっかけづくりにもなるのではないかと思いますので、今後の企画として考えていきたいですね。

北の★女性たちへの  
メッセージ

私たちは、男性とともに日本の食料供給を支えています。このイベントはそういった女性たちが主役になれる場所です。輝くトラクターでレースに参加すると普段味わえない特別な高揚感に包まれますよ。（「メカジョ・スズランカップ」初代メカ馬クイーン 道下恵子さん）